

最優秀賞

神奈川県社会福祉協議会会長賞

ヘルプマークⅡ特別視許可証？

聖セシリア小学校（大和市）

六年 秋谷 咲良

私は、七月の通学中、ある人を何度か見かけていた。

この人を初めて見かけた時は、注意を払えず、「何か」がついている黒い杖を両手に持っているその人は、人と違って危なそうな歩き方をしているな、大丈夫かなと感じた。

次に見かけた時、その人をじっくり見てみると、その「何か」が十字架とハートが書かれた赤いカードだと気づいた。そこで、このカードは何の為の物か疑問に思い、自分で調べてみると、それがヘルプマークだと分かった。ヘルプマークは見かけでは分からない病気やけがを持つ人が皆に伝える為に持ち、病名や障害の名前、必要なサポート等が書かれている。次は、ヘルプマークをつけている人や他の障害者にも声をかけたり、歩くのを手伝ったりと

思いやりを持って接したいと思った。

しかし、三度目にその人を実際に見かけると、声をかける時は名前も言うべきか、禁止されている寄り道扱いになってしまいか分からず、声をかけられなかった。家に帰り、「私にも何か手伝えることができたのでは」と思い、障害者の人が書いた作文を読んでみた。それには、「大丈夫ですか」という声かけだけで安心するとあった。声をかけない理由を考えるのではなく、まず声をかけていきたい。

一方、私はその人をじっくり見てしまったことに気づいた。注視するという行動が特別視に繋がりが、それにその人が気づいて傷ついたかもしれないと、罪悪感を覚えた。ただ、ヘルプマークが「特別視しても良い」という許可証なのかもしれないとも思った。

そして、困っている人を助ける意思表示として使える、逆ヘルプマークを実用化する事で、障害がある人もない人も障害を一方的な特別視も無視もしない共生社会を実現したい。